江戸時代の洛中農村の消防
－江戸時代の京都の消防の研究（その7）－

THE FIRE FIGHTING BY FARMERS IN THE SUBURBS OF KYOTO

A study on the fire fighting in Kyoto under Tokugawa era (No. 7)

丸山俊明*

Toshiaki MARUYAMA

This work intends to disclose the ordering system for actual firefighting in Kyoto city under the Tokugawa regime (Tokugawa era). There is no description about fire extinguishing by farmers. But, in this paper, it will be clarified the fire extinguishing by farmers in the suburbs of Kyoto city. Especially, they worked hard with agricultural tools and logs. They break houses with them for check the spread of fire. Such a successful result proves the fire fighting talent of masses.

Keywords : Fire, Fireman, Firefighting, Kyoto, Kyoto-daikannsho

火事、火消、消防、京都、京都代官所

はじめに

本研究は、江戸時代の京都の消防を検討している。この課題は、日本史研究の分野で秋山國三氏^{注1)}や樋爪修氏^{注2)}、下坂守氏^{注3)}、横田冬彦氏^{注4)}、安国良一氏^{注5)}、藤本仁文氏^{注6)}、冷泉為人氏や鈴木栄樹氏^{注7)}らが畿内譜代藩（郡山・膳所・淀・高槻・亀山…後に篠山）の禁裏御所方火消を重視され、制度内容や上行政上の位置付けを検討されている。しかし、他の消防は注視されず、例えば町人の町火消や近隣町人の手伝いは、その忌避行為を強調した公儀史料を根拠に軽視されてきた。これに対して筆者は、建築史研究の立場から、各消防の実効性を中心に検討している。京都所司代-京都町奉行所体制の防火政策・建築規制に突合せて、町家の建築形式への影響や変化の要因を考えるためである。これまでの成果としては、まず火事場の指揮権が所司代-町奉行所体に帰属、禁裏御所方火消も指揮下に入った事を明らかにした^{注8)}。また先行研究が公儀史料から復元した町火消廃止の経緯（町火消の忌避行為故に町奉行所所属の専門人足制度化）には問題があり、町人が京都消防の一翼を担い続けた事を明らかにした^{注9)}。このほか、御所を囲む築地之内の消防の分担^{注10)}、外様小藩の消防制度^{注11)}や火消屋敷の変遷^{注12)}、直近では京都最初の町人消防専門集団が妙法院所属の寺社火消である事を指摘した^{注13)}。その上でこれらを建築規制等と照合して、所司代-町奉行所体制が土蔵造・塗家を強制しなかった京都の町なみは、強制された18世紀以降の江戸とは異なっていたとの経緯を明らかにしている^{注14)}。

以上に続く本論では、洛中農村の農民消防を取り上げる。江戸時代の京都は洛中洛外町続きとも称され、洛中から洛外へ面的に広がる町々が形成した。つまり御土居（土塁・竹藪からなり視覚的に洛中と洛外を分ける）の外側にも町々はあったが、内側にも農村が点在して町々と接していた。これら洛中農村は、農地は洛中洛外に置いたが集住地は洛中におき、通り沿いには町家形式の建物も並んだ。これらの建物が町々の町家と連続する洛中農村の消防が、京都の消防体制に無縁であった筈はなく、したがって洛中農村の消防の実態の解明も本研究の一助となると考える筆者は、本論では、まず京都近郊農村の公儀の消防に分担があった事を明らかにする（第1節）。その上で、町奉行所消防の分担地域に入る洛中農村の葛野郡東塩小路村を取り上げ、公儀等の消防上の関与をみた上で（第2節）、京都を焼亡させた元治大火で発揮された農民消防の能力や消防方法を検討する（第3節）。また京都市中への出動記録や、火事発生時の報告など、農民消防に関わる事柄を検討して（第4節）、これまで等閑視されてきた洛中農村の農民消防の評価を試みたい。

第1節 京都近郊農村の消防分担

京都近郊農村で公儀の消防が機能した事を示す史料は、門跡寺院妙法院で事務・警護等を担当した武士（坊官）の日常執務記録『妙法院日記記』に複数の記事を見出せる。先ず、元文4年（1736）正月記事に、次の内容が記されている^{注15)}。

* 住環境文化研究所 学博

Culture and Life Environment Laboratory, Ph. D.

京廻り近在出火之節、小堀左源太手代・足輕等差出防筈=候間、向後出火之節者相互之儀=候間、御料者勿論私領村々庄屋年寄早速出印（迎）、右手代之者差図を請人数等差出無油断相防可申候一、東^ハ山根限り、左^ハ修学院村辺、右山科領清閑寺村辺一、西^ハ桂川限り、左桂川越物集女村寺戸辺り、右嵯峨辺迄一、南^ハ下鳥羽村横大路村辺、左伏見領境竹田辺迄、右石川限り一、北^ハ左千束村辺、右賀茂御菩薩池辺迄、右之趣、書面之在々へ不洩様、可触知者也

町奉行所配下の方内雑色が、妙法院支配の町々に触れた町奉行所触書の「覚」である。町奉行所は京都近郊（「京廻り近在」）の火事に、京都代官「小堀左源太」配下の代官所役人である「手代」や足輕等を出動させるとし、幕府直轄領地（「御料」：代官所支配）・「私領：領主が置く地頭支配）どちらの村役人（「庄屋年寄」）にも、「人数等差出」の上で「手代之者差図」をうけた消防を命じている。

農村にも公儀消防の関与を示す上記触書は、方位別に箇条書された場所が代官所消防の出動範囲を示す点も注目される。地図に落とすと、東・北・南側は、明和4年（1767）12月に東町奉行石河政武が確定した洛外と遠在農村の境界に重なる^{注16)}。しかし西は明和4年境界が桂川沿いなのと違い、物集女・寺戸村つまり西山山麓まで広がっている。これにより代官所消防の出動範囲は、三山（東山・北山・西山）が囲む京都盆地全域であった事になる（図1）。

それではこの代官所消防の出動範囲を、同じ所司代配下ながら上位機関の町奉行所消防の出動範囲と比べるとどうか。東町奉行所同心喜多尾家に伝わる『出火心得の事』^{注17)}は、14代所司代松平伊賀守忠周が老中水野忠之の指揮をうけ行った享保7年（1722）の京都消防改革（畿内外様小藩の京都常火消廃止・譜代大名の禁裏御所方火消による京都火役兼帯・町火消強化）以降の方針を記しており、町奉行所消防の出動範囲が次のように記されている。

（東）二条川東新地、栗田口、南禅寺、祇園、青蓮院宮、安井門跡、知恩院…（南）伏見海道支配境、養源院、大仏、妙法院宮、六孫王、東寺、四ツ塚迄…（西）北野社、紙屋川限…（北）室町頭、安居院離迄（最初御伺には御薬園…御薬園迄は御越に及まじく由、御所司代仰せられ候…

これらを地図に落とすと、北と東は洛中洛外町続き、つまり京都と農村の境界に重なる。しかし南と西は御土居と重なり、洛中農村（東塩小路村・中堂寺村・三条台村）も含む（図1）。よって町奉行所消防の分担地域は京都（洛中洛外町続き）と南西部の洛中農村、代官所消防の分担は京都盆地から町奉行所分担地域を除いた範囲となるが、実は町奉行所の中で火事場に先着する役目の番方役人は、出動範囲が「御室、金地院、知恩院近辺、下上加茂、聖護院」、「田中村、修学院、鹿ヶ谷村、岡崎村、東九条村、一乗寺村」つまり東は東山山麓、南は御土居外にも広がっていた（図1★農村）。寛政8年（1796）には他の町奉行所消防並みに縮小されるが、それ迄は代官所消防の出動範囲にも重なっていたのである。このため代官所消防はその存続も疑問視されるが、寛保3年（1743）9月『妙法院日次記』記事には、むしろ代官所消防の体制整備が読み取れる^{注18)}。

京廻り近在出火之節、小堀十左衛門・青木次郎九郎手代・足輕等、右兩人月番=て代ル代ル差出防筈=候間、向後右之方角出火

之節者、相互之儀=候間、御料者私領村々庄屋、年寄早速出迎、右手代之者差図請、人数等差出、無油断相防可申候

（以下、元文4年正月触書と同じ出動範囲を箇条書き）

制度化から7年後、京都代官「小堀十左衛門」と五畿内代官職「青木右次郎九郎」（寛保3年1743補任）^{注19)}の「月番」交代となった。消防の月番交代は東西町奉行所や禁裏御所方火消の間にもあり、特に後者は「月番御火消」「交代御火消」と称された。これらと同じ交代制となった代官所消防に廃止の形跡はない。そうすると寛政8年迄の53年間は、京都近郊農村に町奉行所番方役人と代官所消防の並存した事になる。そうすると町奉行所が寛保元年（1741）5月触書^{注20)}で村々に「与力・同心先達て相越候の条、指図を請、働申す可」と命じたのは、火事場での町奉行所番方役人の指揮権優先を明確にしたと考えられる。しかし寛政8年以降は並存も消え、京都と南西部洛中農村は町奉行所消防、それ以外の京都盆地は代官所消防の分担地域となった。当時の京都には、禁裏御所方火消や幕府京都御大工中井家消防、高瀬川支配の角倉家消防、町奉行所が町々の負担で雇用した専門人足も存在したが、装備・体制共最強の禁裏御所方火消はその名が示すように御所群を囲む築地之内消防が本来任務であり、他の消防も火事場指揮権を持つ町奉行所と関係が強く、三山山麓迄広がる代官所消防分担地域へ出動したとは考え難い。また延享3年（1746）7月には青木次郎九郎が美濃郡代へ転任、その後の交代制度の存否や京都盆地に50数名（足輕除く、江戸後期『県令集覧』^{注21)}という代官所消防の実効性も明らかでなく、農民にも相応の消防能力は必要だった筈であり、その能力は第3節で検討する。

第2節 洛中農村の消防記録

葛野郡東塩小路村（京都市東山区塩小路町）は、下京町々に南接する集住地を御土居内側に置く洛中農村であった。嘉永5年（1852）『宗門改帳』^{注22)}では42戸に217人、享保14年（1729）の村高は178石で、妙法院坊官管轄の妙法院宮領112石が最大ながら、代官所管轄の幕府直轄領31石など複数領主の領地が入り組む相給農村でもあった。ただし行政上は方内雑色松尾氏（村内に10石所有）が町奉行所の触書を触れ、また嘉永6年（1853）史料に「水車出来見分=東西（町奉行所）与力式人・同心式人・松尾様并中井様手代壱人其外供廻り」^{注23)}とあるように町奉行所支配が領主支配に優先される洛中農村であった。また東塩小路村は前之町と藪之内に分かれており、このうち藪之内の庄屋若山要助が嘉永3年～明治2年（1850～1869）に記録した日記（『東塩小路村庄屋要助村方諸事日記』、以下『庄屋日記』）に、農民消防に関する記事を複数見出せる。

第2節第1項 近郊農村における町奉行所の消防分担の確認

先ず『庄屋日記』嘉永4年6月8日記事に、次のようにある^{注24)}。

伏見大亀谷百姓家壱軒焼失=付、当地千本之はやかねつき候故、東西之御役方与力衆式人・同心衆三人并松尾旦那、其外中座廿人計り…上之町迄出役有之、右=付村役可参様申来り、直様上之町迄参り候処、火元御尋=候共、何分前日より大雨=而銭取橋も通行難相成、遠近并所も相分り不申候段申上候処、左候=人足ヲ以火元吟味仕様被仰付、夫より長八=申付三條廻り=て火元見遣し候処、伏見之様=相知、直様松尾様迄申遣し候

図1 2点鎖線は町奉行所消防と代官所消防の出動範囲限界(分担地域)、また各藩邸は宝永・天明大火後の禁裏御所方火消根拠地

「伏見大亀谷」は伏見奉行支配であるが、所司代千本屋敷の火之見櫓が煙を発見、早鐘を撞いたので、所司代配下の町奉行所与力2名・同心3名・雑色松尾氏・中座（捕吏・牢番）が「上之町」に出動してきた。「上之町」は前之町を指すと思われ、町奉行所消防が分担地域南限（第1節）迄出動した事を確認できる。そこで待機して農民に火元調査を命じた目的も、出動を命じた所司代への報告のためと思われる。もっとも『庄屋日記』嘉永4年（1851）2月20日記事には「東九条村烏丸柳屋北隣老軒焼失いたし、直様右場所へ欠付…帰村致し候処、前之町へ中井様火消参り休足被致、其内火納り候事故皆々引取申候事…」^{注25)}とあり、町奉行所と関係が深い中井家消防は東塩小路村の南、東九条村へも出動しているので、町奉行所消防も分担地域から拡大出動した可能性もあるが、洛中農村における町奉行所消防の出動範囲（第2節）が機能していた事は確認された。

第2節第2項 大名火消と寺社火消の出動記録

町奉行所消防の分担地域に入る東塩小路村には、禁裏御所方火消の消防記録もある。『妙法院日記』明和4年（1767）正月記事に「昨夜東塩小路村出火=付、月番稲葉丹後守殿人数被差向=付、為御挨拶御使被遣、松井主殿」^{注26)}とあり、「月番稲葉丹後守」つまり月番御火消（禁裏御所方火消）の淀藩が東塩小路村へ出動している。京都火役も担う禁裏御所方火消は町奉行所消防との関係も深く、その分担地域南限の洛中農村にも出動したのである。このとき妙法院坊官が淀藩邸（図1寛政淀藩邸）に挨拶へ出向いたのは、「妙法院宮御知行所村割」に「高百拾壹石八斗六升、山城国葛野郡東塩小路村之内」^{注27)}とあるように東塩小路村に領地があったためであるが、この関係から妙法院の寺社火消も東塩小路村へ出動している。妙法院は宝暦12年（1762）に支配下町々の負担で町人専門人足による寺社火消を整備した特異な寺院であり^{注28)}、その『妙法院日記』明和8年（1771）正月記事に「東九条村出火=付、塩小路村江大学…（坊官4名連記）…町役人行向、三軒斗焼失、火鎮引取也」^{注29)}、安永2年（1773）2月記事に「出火、塩小路村近辺故、采女…（坊官2名他）…門前火役召連馳向、早速消」^{注30)}、安永8年8月（1779）記事に「東九条村烏丸筋民家五軒計焼失、御領分塩小路村迄、藏人・帯刀、町役人・火役之者等罷出、戌刻前消火故引取候也」^{注31)}とあって、妙法院坊官が寺社火消を率いて東塩小路村へ出動した事が確認される。

以上、町奉行所消防の分担地域に入る東塩小路村では、町奉行所消防のほか京都幕府御大工の中井家、月番の禁裏御所方火消、妙法院の寺社火消といった複数の消防の活動を確認出来る（これらが錯綜した場合の指揮権が町奉行所役人に帰属した事は既に報告した、はじめに）。次節では同村の農民消防を取り上げる。

第3節 元治大火における東塩小路村の農民消防

第3節第1項 農民の消防能力

『庄屋日記』元治元年（1864）7月20日記事に以下が記される^{注32)}。
…又候大筒打込、戌亥風強く、依之仏光寺御堂へ火移り候=付、火勢猶々烈しく相成、巳ノ刻焼下り、又少し火勢よりはり候=付、爰=而火防かんと、其町内ハ申=不及、両六条境、其外七条新地并当村、不動堂ハ勿論、西九条村、東寺村、六条村迄、銘々丸太或ハ農道具を携へ、我々=火を防ぎ候へ共、又候大筒打込へき様子相見へ候=付、無是非打捨引取候…武者申候義ハ、最早是迄=而大筒

鉄砲ハ打込ず候=付、手柄次第=打消しべしと被申候=付、又候銘々棒丸太を持行、魚ノ棚辺而式三軒計打砕き、爰を限りと働けとも、増々北風強く、終=六条御殿=火移り候=付、今は是迄なりと其処を引取、七条之南=而又候打砕き候へ共、大堂へ火移り候=付、今は我家大事と銘々引取、家の棟に押上、まくれ来る火勢を命限りに追返し、或ハ竜吐水=而打消し、爰を最期と防候処、漸々未ノ半刻頃=火鎮り方=相成候へ共、猶も下火を打消、申ノ刻頃=は此辺ハ漸々鎮り、前ノ町ハ河吉殿迄焼失、又南へ飛火=而、大文し屋借屋隣山科屋裏小屋焼失、其外残る、藪之内ハ無事…

前日の「禁門の変」で築地之内から敗走した長州藩士を掃討する薩摩・会津両藩は、京都に火を放ち「どンドン焼け」とも称される元治大火となった。南下する火の手に東塩小路村農民は当初避難を試みるが（「入用の衣類共を筥包ニに致し、銘々御店頭様札名前記し腰=結付、すはと申ハ逃出ん用意」）、街道筋の「御固メ厳しく一人も不通由」を聞きつけ消防を決意（「火を防ぐ構へのみ=相掛」）、そして上記20日記事になった。東塩小路村農民や近隣町人、近郊農民（「町内ハ申=不及、両六条境、其外七条新地并当村、不動堂ハ勿論、西九条村、東寺村、六条村迄」）は、町奉行所役人による指揮が窺えない中で、自発消防（「我々=火を防」）と自律行動（「無是非打捨引取」）に務め、延焼を食い止めており（「漸々未ノ半刻頃=火鎮り方=相成候へ共、猶も下火を打消、申ノ刻頃=は此辺ハ漸々鎮り…藪之内ハ無事」）、大火においても農民消防の実効性が読み取れる。このほか、江戸時代を通じて収集される火事瓦版でも京都南の焼亡範囲は同村辺りで止まっており、単なる偶然とは思えず同様の理由が想像される。

第3節第2項 農民の消防方法

上記記事に消防方法をみると、まず「銘々丸太或ハ農道具を携へ」つまり消防対象を「打砕」く破壊消防があり、目的は延焼をくい止めるための空地確保と考えられる。また「竜吐水=而打消」という散水消防と、「家の棟」に上がり「火勢」を「追返し」、おそらく火の粉を火たたきで叩き消す、大団や畳で煽り返す消防もあり、こちらは特定地域の個別建物の防衛活動と思われる。

以上のうちポンプ放水（「竜吐水」）は、天明3年（1783）に町奉行所所属の専門人足に車付の「龍吐車式挺新調」が記録されて後^{注33)}、町々や農村、個人の住まいにも普及しており、特に先進性を示すものではない。その一方で、丸太や農道具は、農民消防として特徴的である。同じ庶民でも町人は、町火消が存在した安永8年（1779）迄、町奉行所が繰り返し「長梯子三挺、水溜大桶巻、手桶六」「家並=水籠式」「火たたき五本」「むしろ五枚」等の用意を命じており、出動時も「町与申合印之はっぴ」着用が定められて洗練された印象がある^{注34)}。また町火消廃止後も、例えば富小路通沿いの福長町が木戸門脇に消防道具箱を置き、近隣火事に持参したように、専門道具を用いる町人消防は機能していた^{注35)}。一方、丸太等にもみる農民消防の非専門性は、公儀消防に組み込まれた経験がない事に要因が窺える。ただし破壊消防主体の当時であっては、丸太や農具も町人が手にする鳶口と大差なし、あるいはさらに有効であった可能性もある。

第4節 東塩小路村農民と京都の消防との関わり

第4節第1項 京都市中への出動

農民は、町火消のように公儀消防に制度的・組織的に組み込まれ

た記録を見出せない。代官所消防が出動した際の出動協力の義務付けが確認されるだけであるが（第2節）、『庄屋日記』嘉永7年（1854安政元）2月記事には、次のように記されている^{注36)}。

烏丸高辻上ル町、表屋計リ不残出火、尤北風ニ而松尾様町内風下ニ相成、夫故村方人足ニ高張為持、松尾様門前ニ詰合申候、見舞として板三枚并竹内ヘ忒枚、善五郎ヘ忒枚、右之通遣し置候事
烏丸通高辻上ルの火元から南西方向の方内雑色屋敷（松尾）に延焼が迫る事を知った東塩小路村農民は、高張提灯を持ち屋敷門前（図1中①）へ出動した。しかし火事場での消防記録はなく、東塩小路村領主の一人である松尾氏との関係を考えての出動と思われる。

同年4月3日には、禁裏御所など築地之内全域から上京町々を焼亡する大火「毛虫焼け」が起き、『庄屋日記』には「大仏御里坊ヘ人足十人計り差出し候、猶又上之町権兵衛殿家内の里も焼失ニ付、村方より人足十忒三人召つれ、庄蔵殿参りくれられ候」^{注37)}とあって、妙法院宮里坊（「大仏御里坊」）がある築地之内（院参町）へ出動した事が分る（図1中②）。消防の有無は明らかでなく、「上之町権兵衛殿家内の里」の場所も不明であるが、先の松尾氏屋敷と同様に、東塩小路村の縁者屋敷の警護や見舞いが目的と推測される。

さらに安政4年（1857）7月25日記事^{注38)}にも「堀川高辻下ル東側出火ニ付、人足同道ニて参り、松尾様筆工竹内慶介殿見舞、夫より堀川仏光寺上ル与三郎殿妹お梅殿方ヘ相見舞」とあり、堀川高辻下ル（図1中③）や堀川仏光寺上ル（図1中④）まで、庄屋が人足を率いて出動する。この時も方内雑色と関係の深い「筆工」（書類作成業者）屋敷や村内農民の縁者を見舞っているが、やはり消防記録はない。

以上、東塩小路村農民は村役人の指揮の元、京都市中へも自由に活動しているが、領主や関係者、村内縁者の屋敷を見舞う記録が多く、火元へ迅速に駆け付ける事を目的にした消防集団ではない。その中で『妙法院日次記』享保10年（1725）6月27日の記事^{注39)}は、京都における東塩小路村農民消防の実働記録として注目される。

池田町瓦師忠兵衛裏、瓦焼候松葉千束余積有之候松葉ニ火付、夥敷燃上ル、近辺小屋有之、火移り候故引崩し候事、近頃之騒動也、依之御殿より人数被出、大仏門前之者、其外東塩小路村・柳原上下郷、庄屋・年寄人数召連罷出、菅谷左京…（坊官9名連記）…等出役、未刻火静ル

妙法院支配の池田町（図1中⑤）まで「東塩小路村」の村役人が「人数」を率いて出動（「庄屋・年寄人数召連罷出」）、坊官指揮の元で鎮火させている。東塩小路村には専門人足を雇用了た様子がなく、この「人数」は村内農民と推測され（前述「毛虫焼け」時の「村方より人足」も同様と思われる）、京都における農民消防の実効記録として重要である。したがって東塩小路村農民は、農民消防を自発的に組織して京都にも出動、状況によっては消防も行ったのであり、様子伺いの見舞いだけを目的に出かけていたとは考え難い。

第4節第2項 東塩小路村農民と消防関係の申請手続き

『庄屋日記』嘉永7年（1854）4月3日記事^{注40)}に、次が記される。
生姜畑番小屋焼失ニ付、月番引火元見参り、夫引前之町年寄嘉兵衛殿并本人留守中ニ付、吉郎兵衛代河内屋熊吉直様月番御役屋敷ヘ参り候处、何分明朝可参よし被仰付、尤断書差出し様被仰付…
村内農地の番小屋焼失後、月番御火消（禁裏御所方火消）が火元確認で来村した事が分る。そして農民は次の「断書」を提出する。

乍恐御断奉申上候
昨夜戌ノ下刻、私所持之生姜畑、室町通木津屋橋下ル、御土居より壺丁余り北ヘ入ル字ふもとト申处ニ番小屋を建…右番人無何心多葉粉之吸殻を捨、直様きえ候儀心得罷居候处、回輪わらニ而組立候事故、右わらヘ火相廻り焼失仕何とも奉恐入候、何分不調法之断、乍恐御断奉申上候、以上 嘉永七寅年四月三日
御月番御役人中 東塩小路村片原町番小屋主百姓印・年寄印

上記書式により、農民は月番御火消へ謝罪した事になる。ただし町奉行所は、安永3年（1774）4月触書^{注41)}において、月番御火消への通報や火元の確認を「筋違」と禁じ、町奉行所へ通報を命じていた。それに違反するこれらは、活動記録のない町奉行所の代役を月番御火消が務めて提出された可能性もあるが、明らかではない。しかし東塩小路村が町奉行所消防の分担地域に入る以上、安政5年（1858）6月4日記事の例こそ普通であった可能性が大きい^{注42)}。この火事は、東本願寺の『公儀差出留』^{注43)}に「両堂を始、御構内…御寺内五拾九町之内境町は半分程、大工新町相残、其余不残類焼」とあるような大火で、東塩小路村へも焼下った。『庄屋日記』には「当日大働いたし候若者ヘ心附遣ス、東寺村之人」「三人ヘ百疋ずつ」とあり、近隣農民の実効的な消防助勢を伝えるが、その一方で町奉行所には、鎮火後の関与を次のように記している。

…当村ハ亥ノ下刻類焼…漸々明六ツ過ニ火納り、然ル处、御目附様追々御見分ニ相成ニ付、先詰ニ下雑式村上・津田并筆工三人、要助宅ヘ出役有之…右取調候处、裏借屋共三拾貳軒類焼…右当村分焼失之場所絵図取、四ツ半頃より漸々夜ノ五ツ半ニ被引取…
類焼後の東塩小路村に、雑色・筆工を従えた町奉行所の「御目附様」が来村、庄屋「要助」宅で取調べを行い、焼失箇所の「絵図」を取って帰った。翌5日に年寄が「御役所ヘ出火届」へ出向き、7日には庄屋と年寄が手分けして「出役之衆中ハ挨拶向相談いたし、包物相調」を行うが、8日に雑色の「松尾様より呼状参り」、9日に松尾氏屋敷へ出向いたところ、年寄が5日の「出火届」で提出した火事場「図面」が「御目附様」取調べ時の絵図と異なるとして再提出を命じられた。そこで筆工に作成を依頼した「出火届」が次である。

乍恐御断書
諏訪町松原下ル町家より、昨昼九時分出火候ニ付、御火消方御人数御出、御消留被成下候处、当村百姓家数合三拾貳軒・土蔵壹ヶ所類焼仕候、尤怪我人ハ勿論、牛馬別状無御座候、僊絵図相添、此段御断申上候、以上 安政五午年六月五日
御奉行様
御築地堺町御門より方角午未方、道法凡廿四丁程、御城三条口より方角巳午之方、道法凡貳拾三丁程
（絵図…村内配置図に各戸住人名を記入したもの）

庄屋要助印 年寄庄蔵印
築地之内の「堺町御門」と二条城「三条口」からの距離が記されるのは共に京都の重要消防対象であったからであるが（亀山藩士の文政2年『京都火消詰覚書』^{注44)}にも「洛中洛外共出火之節、御人数不残消防罷在候所、万一御築地近辺并二条御城近辺出火候ハ、当初防場所ハ捨置、右之場所一番手ニ番手とも駐着可有」とある）、町奉行所分担地域に入る洛中農村では、町奉行所は消防に関与しなかった場合も火事発生後の「出火届」提出を義務付けていた事が分る。

本論のまとめ

本論は、江戸時代の京都の消防の研究について、従来等閑視されてきた洛中農民の消防を、東塩小路村の『庄屋日記』等に検討した。

- ・寛政8年以降、町奉行所消防は京都と南部洛中農村、代官所消防はそれ以外の京都盆地を広く分担地域としていた。
- ・南部洛中農村の東塩小路村では、町奉行所役人や雑色・中座、禁裏御所方火消や中井家の消防も確認され、京都市中の町々の扱いと変わらない。このほか最大領主の妙法院も、坊官が寺社火消を率いて出動、複数消防が錯綜する状況も推測される。
- ・元治大火時の農民消防は、丸太や農具を使う破壊消防のほか、竜吐水の散水消防等もあって組み合わせていた。大名火消や専門的な消防道具を使う町人消防に比べて非専門性は否めないが、自発的・自律的に行った消防は京都を焼亡させた元治大火の延焼をくい止める実効性を持ち、町人消防と比べて遜色ない。
- ・東塩小路村農民は京都の領主や村内縁者屋敷にも警護や見舞いのため出動、状況に応じて消防も念頭に置いた事が窺える。

以上から本論は、洛中農村の農民消防が、京都近郊並びに京都の実効的消防集団と位置付けられると結論する。今後は、さらなる消防事例の収集や代官所の消防分担地域、遠在農村における消防実態の解明を課題とするが、農民消防が京都近郊農村の建築形式や景観に与えた影響についても検討を行いたい。

注

注1) 秋山國三編『近世京都町組発達史』法政大学出版局 1980

注2) 樋瓜修「江戸時代の京都大名火消-膳所藩を例として-」（「近江地方史研究」第27号1992）、同「江戸時代の京都町火消」『京都市歴史資料館紀要第10号』京都市歴史資料館 1992 ほか。

注3) 『匠 成熟する都』（講談社1994）より、下坂守「天明の大火」。

注4) 横田冬彦「非領国における譜代大名」尼崎市地域研究資料館紀要 2000

注5) 安国良一「京都天明大火研究序説」『日本史研究』四一二 1996

注6) 藤本仁文「近世京都大名火消の基礎的考察」『史林』88巻2号2005.3、同「元禄-享保期三都における消防制度確立」『ヒストリア』209 2008.3

注7) 立命館大学・神奈川大学 21 世紀 COE プログラムジョイント・ワークショップ報告書『歴史災害と都市（京都・東京を中心に）』2007.2。鈴木栄樹氏は同書「近世京都の火災と復興」で嘉永7年町奉行所触書が町々に堺町御門参集を命じた「町夫代り人足」を安永8年制度化の専門人足とされたが、同じ触書は早く宝永4年9月から確認され、また安永8年制度化の専門人足は火事発生時に町奉行所へ参集する組織で別の存在である（後掲注9拙稿）。また冷泉為人氏は同書「公家町の火災と防災」で元禄3年迄は京都に大名火消が存在せず、京都常火消と禁裏御所方火消が「合体」して「京都大名火消」成立とされた。しかし譜代藩主補任の所司代は幕初から「火消番」の大名火消であり、また元禄3年に「火消番」を肩代わりした外様小藩の「京都火消」「京都常火消」も大名火消、その享保7年廃止で「京都火役」兼帯となった「御所方御火消」も譜代藩の大名火消、他方これらが「合体」した形跡はなく、「京都大名火消」という固有名称の火消の存在も確認出来ない（後掲注11、注12拙稿）。

注8) 丸山俊明「火事場における指揮権について - 江戸時代の京都の消防の研究（その1） - 」日本建築学会計画系論文集第573号 2003.11

注9) 丸山俊明「町火消について-江戸時代の京都の消防の研究（その2）-

日本建築学会計画系論文集第579号 pp119-126 2004.5

注10) 丸山俊明「京都所司代・京都町奉行所と御所の消防-江戸時代の京都の消防の研究（その3）-」日本建築学会計画系論文集第591号2005.5

注11) 丸山俊明「京都火消と京都常火消-江戸時代の京都の消防の研究（その4）-」日本建築学会計画系論文集第594号 2005.8

注12) 丸山俊明「京都火消屋敷と京都常火消屋敷-江戸時代の京都の消防の研究（その5）-」日本建築学会計画系論文集第604号 2006.6

注13) 丸山俊明「江戸時代の京都の寺社火消-江戸時代の京都の消防の研究（その6）-」日本建築学会計画系論文集第626号 2008.4

注14) 丸山俊明『京都の町家と町なみ - 何方を見申す様に作る事、堅く仕間敷事 - 』第一章～第三章 昭和堂 2007

注15) 史料纂集『妙法院日記』第九 pp140-141 続群書類従刊行会 1992

注16) 京都周辺の35村を結んで内側を洛中洛外とし、外側を遠在農村と定めた。詳細は丸山俊明・日向進「京都町奉行所の明和4年12月の触書について-江戸時代の山城国農村部における建築規制（その2）-」日本建築学会計画系論文集第539号（2001.1）を参照されたい。

注17) 京都氏歴史資料館架蔵フィルム『喜多尾辰夫家文書』、前掲注8) 注11)

注18) 史料纂集『妙法院日記』第十 p138 続群書類従刊行会 1992

注19) 『新訂 寛政重修諸家譜』第二十一 続群書類従刊行会 1964

注20) 『京都町触集成』第二巻 p422 岩波書店 1984

注21) 『県令集覧』吉川弘文館 1975

注22) 京都氏歴史史料館架蔵フィルム『高橋一男家文書』所収

注23) 『若山要助日記』上巻 p161 京都市歴史資料館 1995、同書「解説」では日記の成立背景や村方執務日記としての性格が詳述されている。

注24) 『若山要助日記』上巻 p24 京都市歴史資料館 1995

注25) 『若山要助日記』上巻 p18 京都市歴史資料館 1995

注26) 史料纂集『妙法院日記』第十六 p154 続群書類従刊行会 2000

注27) 史料纂集『妙法院日記』第二十一 p63 続群書類従刊行会 2006

注28) 丸山俊明「江戸時代の京都の寺社火消-江戸時代の京都の消防の研究（その6）-」日本建築学会計画系論文集第626号 2008.4

注29) 史料纂集『妙法院日記』第十七 p117 続群書類従刊行会 2001

注30) 史料纂集『妙法院日記』第十七 p209 続群書類従刊行会 2001

注31) 史料纂集『妙法院日記』第十九 p63 続群書類従刊行会 2003

注32) 『若山要助日記』下巻 p241 京都市歴史資料館 1997

注33) 『京・まちづくり史』（昭和堂2003）拙稿「町触・町式目と町づくり」

注34) 『京都町触集成』第六巻 p39 岩波書店 1985

注35) 丸山俊明「木戸門の役割と建築許可申請（江戸時代の京都の木戸門の研究その1）」日本建築学会計画系論文集第569号2003.7

注36) 『若山要助日記』上巻 p179 京都市歴史資料館 1995

注37) 『若山要助日記』上巻 pp184-185 京都市歴史資料館 1995

注38) 『若山要助日記』上巻 p340 京都市歴史資料館 1995

注39) 史料纂集『妙法院日記』第六 p36 続群書類従刊行会 1999

注40) 『若山要助日記』上巻 184 京都市歴史資料館 1995

注41) 『京都町触集成』第五巻 p250 岩波書店 1984

注42) 『若山要助日記』下巻 21 京都市歴史資料館 1997、包金は「金五拾疋御見分之御目附寺田官左衛門様、一朱 御役所届之節の礼敷 岡本氏、同百五十疋 筆工三人当村へ出役之礼-外-金百疋松尾様、同五十疋竹内へ」等。

注43) 『史料 京都の歴史』第12巻 p405 平凡社 1981

注44) 京都府立総合史料館蔵『及川家文書』所収

（2008年5月28日原稿受理、2008年8月5日採用決定）